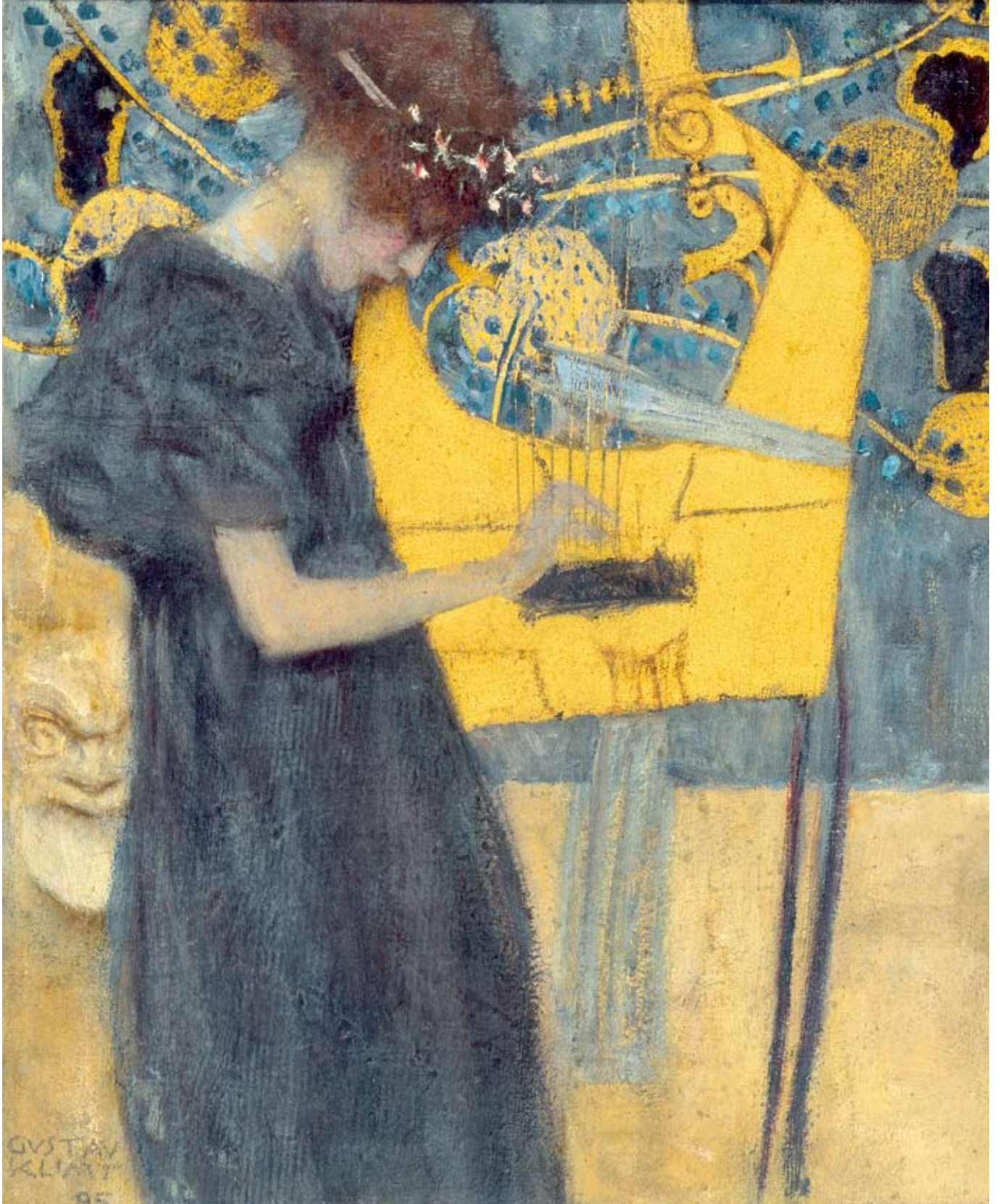


月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊27年目
創刊1989年 Nr.314

2015年8月号



グスタフ・クリムト 『音楽』(下絵) 1895年 部分 バイエルン州立絵画コレクション・ミュンヘン「ノイエ・ピナコテーク」所蔵
ベルヴェデーレ下宮 Unteres Belvedere 企画展「クリムトとリング通り Klimt und die Ringstraße」にて2015年10月11日まで展示
Gustav Klimt Die Musik (Entwurf), 1895 Öl auf Leinwand 37 × 44,5 cm © bpk / Bayerische Staatsgemäldesammlungen

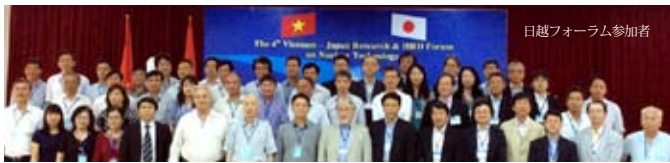


杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 47



我が国産官学の協力により、一昨年の十二月からベトナム原子力界のリーダを担う人材の育成、自ら研究や設計ができる自立した研究者・技術者の育成を目的とした日本ベトナム原子力研究・人材育成フォーラムを開催している。本年六月十一、十二日に第四回フォーラムがベトナムのハノイで開催された。第三回までは、熱流動、材料、研究炉と個々の研究開発がテーマだったが、今回は全てに共通する人材育成について情報交換を行うとともに、意見交換を通じた日本・ベトナム間のコミュニケーション・ベトナム間を確立することがねらいである。我が国からは

国際原子力開発センター、原子力機構、東工大、長岡技術科大、東大、北大、京大から約三十名、ベトナムからは原子力庁、放射線・原子力安全規制庁、原子力研究所、ハノイ工科大学などから約四十名の参加があった。フォーラムでは計二十五件の発表とパネル討論があった。「原子力導入国におけるリーダ育成のた



めの人材育成計画」と題するパネル討論では、筆者はベトナム原子力研究所のトアン氏と共同議長を務め、日越各三名、計六名のパネリストからの基調報告を受け、フロアを交えて活発な討論があった。最後に筆者より、物理原理に基づく基礎的かつ深い知識の習得、政府による戦略と強力な支援、研究炉やシミュレータの建設を通じた能力の向上、プロジェクト管理への応用と統合、人材育成ネットワークの構築、国際協力の重要性など八項目をパネル討論の結論としてとりまとめた。一泊機中泊四日と弾丸出張ではあったが、全体に意義深いフォーラムであったと思う。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の植物園について述べてみたい。ウィーンのベルヴェデーレ宮殿庭園内にある植物園は、一七五四年にマリア・テレジア女帝が設立したもので、オーストリアや欧州の植物などが植えられている。約八ヘクタールの敷地には、科学研究、希少種の保護などを目的に、二万五千種の植物が栽培されている。また、シェーンブルン宮殿庭園内にあるパルメンハウスは、一八八二年、皇帝フランツ・ヨーゼフの命により建てられた欧州最大規模の温室である。温室内は三つの気候帯に分かれており、一番高い屋根のホールには地中海地方やカナリア諸島、南アフリカなど、北側のホールには中国、日本、ヒマラヤなど、南側のホールには熱帯、亜熱帯地方の植物が植えられている。

一方、京都市北部にある京都府植物園は、一九二四年に大典記念京都植物園として開園した。第二次大戦中は園内に菜園が設けられ、戦後は連合軍に接収され住宅が建てられたと言ふ。多くの樹木が伐採されるなど苦難の時代が続いたが、六二年その姿を一新し再び公開した。その後施設の整備を積み重ね、九二年に竣工した回遊式観覧温室は世界の熱帯植物が身近に観賞でき、我が国最大級の温室である。同園には、広大な芝生地、桜林、ばら園、竹笹、針葉樹などがあり、約二四ヘクタール、収集植物は約二万五千種と我が国最大規模である。八十七万人以上（二五年度）と我が国最大の入場者がある。両市の植物園は歴史と規模を誇るとともに、市民の憩いの場、教養・研究の場としての役割を果たしていることが共通している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、植物園を一度訪問する機会があった。パルメンハウスには先日のウィーン出張時に寄ることができた。大きな蓮の花が印象的だった。京都府植物園は学生時代に何回か訪れたが、近年も家内らとともに訪問している。両市の植物園を紹介できた幸運に感謝しつつ、パルメンハウスの写真掲載させていただく。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■



パルメンハウス